

Cycling Photographic Periodica

Escape



**2010 JAPAN CUP
CRITERIUMS
2010.10.23**



It's



Show Time

初開催となったジャパンカップ前日のクリテリウム。片道3車線もある宇都宮市の大通りが閉鎖されると、そこはもう1.6キロの自転車コースに変身だ。歩道は人で埋め尽くされ、2時間以上前から陣取っている人、商店街のアーケードの上から見る人、パルコの建物内から眺める人、大人も子供も若者も年配の方も一目見ようと大通りに集まってきた。スタートが近づくにつれ、刻々と高まる期待感。世界選手権で9位に入った新城幸也、昨年ツールを完走した別府史之、今年の日本チャンピオン宮澤崇史、海外一流スプリンターのロビー・マキュアン、彼らの登場に観客たちは歓声を上げる。なかでも地元宇都宮ブリッツェンが登場すると会場のボルテージは一気に上がった。ロードレースを見たこともない通りすがりの人も、競輪ファンのおじさんも地元チームの登場に惜しみない声援を送った。集まった観客は約3万人。宇都宮の大通りは、まるでツール・ド・フランス最終日のパリ・シャンゼリゼのようで、その熱気に選手たちも圧倒されるほどだ。さあ、いよいよ待ちに待ったレースのスタートだ。



Yoshimitsu Tsuji Preemptive strike



辻善光は自信に満ちている。力強いペダリング。深い前傾姿勢から爆発的に伸びてゆくそのゴールスプリント。思い切りの良い走りは、見ているものに勝利の予感を抱かせる。

2010年、ツール・ド・熊野で国際レース初勝利以降、彼の走りはより攻撃的になったように見える。宇都宮ブリッツェンという誕生2年目の地域密着形独立系チームにとって「勝利」の2文字は国内の、どのチームより重い意味を持つ。

この日、スタート直後から飛び出したチームメイト中村誠のエスケープに同調し、集団から抜け出した。このレースで彼が与えられた役割はチームのエースである。ゴール直前で、持てる力を爆発させ、集団から抜け出し勝利をもぎ取る事が彼の本来の仕事だ。レース序盤からエスケープを作るのは、通常エースを助けるアシストの役割である。

しかし、この日の彼の走りは違っていた。ロードレーサーとしての辻善光の闘争本能と、地域密着形独立系チームを支え続けたホームタウンである宇都宮の人々へのメッセージを送るかのように先頭に立って走った。レース序盤、先頭を切って走る赤い稲妻の姿を、沿道を埋めつくした観客達の声援が、後押しする。数周だけでも彼の気迫のこもった走りは、宇都宮の人々に鮮烈な記憶を刻んだ。

Fast Break



別府史之は、現在日本人で唯一トップチームの「チーム・レディオシャック」に所属する選手である。昨年、新城幸也と共に彼らの夢であったツール・ド・フランスに初出場し、見事完走を果たした。しかし、それだけにとどまらず、最終日の第21ステージ、パリ・シャンゼリゼ通りで自らプロトン（集団）から飛び出し、日本人初の敢闘賞をもぎ取った。日本のロードレースファンの誰もが夢見たその姿を彼は初出場のツールで成し遂げたのである。

宇都宮での彼の走りはまさにその再現であった。序盤からの動きに積極的に参加し、数人のグループが形成されてからは、じわじわとスピードあげる。プロトン（集団）との差が徐々に、徐々に開いてゆく。

ヨーロッパでトッププロ相手に彼は幾度となくこのような闘いを繰り広げてきた。その闘いは誰の為でもなく自分自身の存在意義を示す気高い孤高の闘なのだ。スピード差をつけてプロトン（集団）から飛び出す強靱な肉体、レースを読む冷静な判断力、そして迷いのない勇氣。そのどれを欠いても集団から抜け出すことは出来ない。

宇都宮の大観衆が見守るこのレースでも彼はその存在を誇示するようにプロトン（集団）から飛び出して見せた。海外選手2人を相手に別府史之は先頭を走り続ける。風の抵抗を軽減する為に顔を下げた彼の姿には「逃げる」という強靱な意志を感じた。

39

「大木を切り倒す斧のようだ」と例えた。待つのではなく攻める走りが彼の一番の特徴。一際目立つ果敢な姿は、宇都宮の人々の目にも映ったであろう。39歳にして福島晋一は、来年もなおアタックし続ける。

「兄ちゃん」の愛称で数多くの選手たちから慕われる福島晋一。普段はやさしい兄ちゃんだが、レースになると目の色が変わる。自転車レースは彼を違った人に豹変させるのだ。沸き立つオーラを出し年齢をも超えて果敢に攻める走りは、見る人々を魅了し誰もが憧れるスターとなる。フランスで経験を積み、色々な苦労をしながらここまで上りつめた彼。自らを奮い立たせ、絶妙なタイミングで集団から飛び出すアタックをある選手は

Shinichi Fukushima

Attack



Makoto Iijima

39

トラックで自分には厳しく、時には頼れるエースであり、時にはアシストとしても献身的に走ることでできる選手である。その彼がジャパンカップを終えた後、今シーズ限りで引退することを発表した。この宇都宮の大観衆に見せたアタックには万感の思いが込められていたに違いない。自転車界のボス飯島誠。39歳。その偉大な戦歴に似つかわしくないひっそりとした終幕。多くの人々の記憶の中にその走りを刻み、新たな一歩を進みだした。

トラックもロードもこなし、とりわけトラックのポイントレースでは、シドニー、アテネ、北京と3度のオリンピック出場を果たしている飯島誠。鋭い目つきで異彩を放つ風貌は、どこか近寄りがたい雰囲気だが、話すと気さくで優しい。ス



Pride fought in

25

Yusuke Hatanaka

今年世界で一番活躍した日本人選手といえば、新城幸也に他ならない。ジロ・デ・イタリアでは第5ステージに3位に入り、世界選手権で9位、ツール・ド・フランス2年連続完走とフランス人記者もうなるほどの活躍を遂げた。それに対し、今年日本で一番めざましい活躍を見せたのが、畑中勇介だ。Jサイクルツアーで4勝し、Jツアー個人総合優勝に輝いた。新城幸也26歳、畑中勇介25歳。フランスを拠点にしてヨーロッパで頭角を現す新城と大阪をベースに日本のレースで実力をつける畑中。奇しくも同年代の2人の走りは、日本ロードレース界の持つジレンマを象徴しているかに見える。海外で走らなければ強くなれない、しかし国内でロードレースという競技の認知を高めたい限り未来が見えない。

立場の違う若い2人がまるで背負わされた十字架を振り払うように、世界の舞台で闘う者のプライドと国内で闘う者のプライドをぶつけあう。共に、さらなる強さを求めて……。

Yukiya Arashiro

26

the world

the Japan



Smile

Fumiya Bepko



第14周目、彼は笑っていた。先頭を走る3人のうちただ一人の日本人選手である別府史之。宇都宮市の大通りは熱気に包まれ、「別府」「フミ！」「がんばれ」観客たちが歓声を上げる。ハイスピードで巡航しながら、すでに22km先頭で逃げ続けている。少しは疲労もあるだろう。だが、先頭を走るフミは満面の笑みを見せていた。彼は何よりこの歓声の中先頭で走ることに喜びを感じていた。昨年の夏、パリのシャンゼリゼを走った時もそうだった。ツール・ド・フランス最終日、シャンゼリゼで逃げを決めた彼は、笑いながら大歓声の中走っていた。いつかは捕まると分かっている、逃げていけば全ての注目が自分に集まる。逃げることで自分をアピールできるのだ。観客たちの視線を釘付けにし、フミは悦楽にひたりながら走り続けた。全ての声援を身体全体に浴びながら…。15周目のスプリント賞を獲得したフミは、その後まもなくペースアップした集団に捕まることになってしまいが、逃げていたことで多くの観客の胸に刻まれることになった。別府史之、彼は一流プロ選手であり、大いなるエンターテイナーである。



ジャパンカップ2010クリテリウム結果

- | | | |
|-----|--------------------------------------|--------|
| 1位 | トーマス・バルマー (オーストラリア、ドラパック・ポルシェ) | 42'20" |
| 2位 | デニス・ガリムジャンフ (ロシア、カチューシャ) | |
| 3位 | グスタフエリック・ラーション (スウェーデン、サクソバンク) | |
| 4位 | ロビー・マキュアン (オーストラリア、カチューシャ) | +02" |
| 5位 | アンドレ・ステーンセン (デンマーク、サクソバンク) | |
| 6位 | クラウディオ・クチノッタ (イタリア、デローザ・スタックプラスティック) | |
| 7位 | 宮澤崇史 (TEAM NIPPO) | |
| 8位 | ブーチョン・サイウドンシン (タイ、クムサン・ジンセン・アジア) | |
| 9位 | 辻善光 (宇都宮ブリッツェン) | |
| 10位 | デーヴィッド・ペル (オーストラリア、ドラパック・ポルシェ) | |

Goal Sprint Thomas Palmer

20周に及ぶ戦いは、ラスト周回で決まった。折り返し手前で飛び出したグスタフエリック・ラーション(スウェーデン、サクソバンク)にトーマス・バルマー(オーストラリア、ドラパック・ポルシェ)とデニス・ガリムジャンフ(ロシア、カチューシャ)が追いつき、集団との差はわずかに開く。3人が縦一列となってゴールを目指す。ゴールまで残り250メートル、真ん中から赤い弾丸が飛び出した。ドラパック・ポルシェのバルマーだ。明らかに気迫が違っていた。炎沸き立つ熱い走り。その勝つ!と言う闘志みなぎるアタックに他の選手は誰も反応できない。クライマックスを待ちわび一体となった観客たちの歓喜の声が地鳴りのように響き渡る中、彼は両手を広げてゴールした。「こんなに多くの観衆の中で、勝って嬉しい」。20歳のバルマーにとって、こんな大歓声の中走ったのは初めてだったに違いない。満面の笑みでこの勝利をかみしめた。彼にとって宇都宮は忘れられない思い出の地になったに違いない。



2010年は片山右京にとって生涯忘れられない年になるだろう。前年に起こってしまった大きな事故。友を失い、失意のどん底にある時、彼をささえたのは自転車だった。年が変わり、彼は忙しいスケジュールの合間を縫って折宇都宮ブリッツェンのレースにスタッフとして帯同した。レースを走る選手を支えるスタッフとして黙々と働く姿からは、かつてのF1パイロットの面影はない。スタッフの一員として働く彼の姿はまるで何かを懺悔するかのように見えた。

そんな彼の姿を見て、宇都宮ブリッツェンは選手としてジャパンカップを走る事を打診する。競技は違えど、トッププロのレースに参戦する責任はだれよりも理解していたはずだ。そして彼はその答えを求めるために、あの事故の現場に戻った。「前に進む...」彼の出した結論だった。若かりし頃、レーサーになるためにサーキットのガレージに寝泊まりし、パチンコの店員やトラックの運転手をしながらレース資金を捻出した。目標を定めれば全てのプライドを捨てて最短距離を歩むのが彼のスタイルだ。出場するクリテリウムにチームの戦力として戦えるだけの力を短期間で習得するには若き日のように、すべてのプライドを捨て、寝る間を惜しんでトレーニングしたに違いない。

片山右京の出場をクリテリウムでエースをまかされた辻善光は集客要員としてでなくチームの戦力として見ていた。コーナーリングのテクニク、高速で巡航可能な能力とレースへの集中力。チームのエースとしてアシスト片山右京を戦力として受け入れた。

海外のトッププロが参加するクリテリウムで片山右京は見事にその大役を果たした、チームのエースの風よけになり、エース辻善光をゴールで勝負させる為に自らの力を惜しみなく出し尽くした。レース終盤、彼はチーム一員として与えられた責任を果たし、痙攣する全身を必死押さえながら自転車を降りた。

レース終了後、地元チームである宇都宮ブリッツェンの選手たちが沿道の観客に感謝のパレードを行った。その中心に、少し照れくさそうなロードレーサー片山右京の姿があった。

Advancement

Ukyo Katayama



Cycling Photographic Periodica **Escape**

Production

Click R@dio Publishing

Editor, Design B.J.

Design Adviser Colon

Writer Chiho, B.J.

Photographer B.J.

Chiho

Adviser Sohta Kitazawa